

ローマ人への手紙4章 「アブラハムの信仰に倣いて」

1A 肉による父祖 1-15

1B 行いによらない義 1-8

1C 信仰による義 1-5

2C 不敬虔を義と認める方 6-8

2B 割礼によらない義 9-12

2A 信仰による父 13-25

1B 約束の相続 13-16

2B 望みえない時の望み 17-22

3B イエスの復活による義 23-25

本文

ローマ人への手紙 4 章を開いてください。私たちは、ついに神さまの福音、良い知らせの核心である、「信仰によって義と認められる」ことについて、3 章で学びました。私たちの努力や行いによらず、もっぱら神の恵みによって、イエス・キリストを信じる信仰によって与えられる義です。そしてパウロは、4 章において、具体的な一人の人生によって、その信仰によって義と認められたことに色付けをします。神によって義と認められる、信仰によって認められると聞いても、それが抽象的な、無味乾燥な教えにしか聞こえないかもしれません。けれども、ユダヤ人であればだれもが知っている、彼らが父と仰いでいる、アブラハムの生涯が、まさに信仰によって義と認められた生涯であったことを話していきます。

1A 肉による父祖 1-15

1B 行いによらない義 1-8

1C 信仰による義 1-5

¹ それでは、肉による私たちの父祖アブラハムは何を見出した、と言えるのでしょうか。

旧約聖書の中で、最も偉大な人物と言ったら二人を挙げられます。一人は、アブラハムです。もう一人はダビデです。アブラハムは、イスラエル人が彼から出て来るという、ユダヤ人の父祖であります。紀元前二千年頃の人です。彼から、イスラエル人が生まれました。そしてその子孫から、救い主キリストが出て来ることも約束されました。もう一人、ダビデはユダヤ人の王です。紀元前千年頃の人です。ダビデ王朝から、キリストが出て来て、神の国が建てられることが約束されています。新約聖書の冒頭、マタイによる福音書 1 章 1 節には、「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」とあります。確かにイエスが、アブラハムの子孫であり、ダビデの世継ぎの子であり、この方は約束のメシア、キリストだということです。

そしてアブラハムであります、「肉による私たちの父祖」と言っていますが、ユダヤ人にとって血縁の父祖であります、パウロは、彼の信仰に倣う者であれば、血縁によらなくとも、信仰によってアブラハムの子孫になると論じていきます。

² もしアブラハムが行いによって義と認められたのであれば、彼は誇ることができます。しかし、神の御前ではそうではありません。³ 聖書は何と言っていますか。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあります。

ユダヤ人たちは、当時、神の前に義と認められるのは、行いによるのであり、律法を行うことによってなのだと思っていました。けれども、アブラハムは決してそうではありませんでした。アブラハムだけでなく、旧約時代に生きた、神に選ばれた人々がお世辞にも、行いによって義と認められたと言えないのです。決して、行いにおいては誇ることのできるようなものではありませんでした。多くの失敗をしました。例えば、妻サラを自分の妹だとして、エジプトのファラオや、アビメレクが彼女を自分の妻として迎えることを許してしまいました。ユダヤ人たちは、「私たちの父はアブラハム」として誇っていたのですが、その行いは誇ることができなかったのです。

けれども、彼は神に喜ばれた人だったのです。なぜか？信仰によってでした。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とありますが、これは、創世記 15 章に出て来る言葉です。アブラハムには、子が与えられていなかったのですが、神は「あなたへの報いは非常に大きい」と言われます。まだ息子がいないのに、だれを相続にすればよいのですか、しもべを相続人にすべきでしょうか？と尋ねると、「あなたから生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」と言われるのです。そして外に連れ出して、夜空の星を数えるように言われました。そして、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われたのです(5 節)。

ここにある「子孫」というのは、第一に、後に大人の男性だけで 60 万人以上にもなるイスラエル人のことを示しています。けれども、それだけではありません。第二に、そのイスラエル人から、メシア、救い主が現れることを示しています(ガラテヤ 3:16)。さらに、そのキリストから、イスラエル人だけでなく異邦人も含んで、多くの信仰による子が出て来ることも含んでいます。ですから、まさに星のような無数の子孫です。

こんなことを示されて、幼子のように、身を低くしなければ、その約束を受け取ることはできません。途方もない約束です。しかし、アブラハムは神を信じたのです。神は、アブラハムの行いではなく、ご自身とその言われたことを信じた、その信仰によって救われたのです。

⁴ 働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見なされます。⁵ しかし、働きがない人であっても、不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認め

られます。

アブラハムに神が示されたのは、恵みです。働きもないのに、むしろ不敬虔な者なのに、それでも一方的に良くしてくださったのです。アブラハムの生涯は、何か彼が良いことをして、それで神が報いを与えられたというものではありません。順番が逆です、神が良くしてくださって、その恵みの中で彼が神に従っていった、ということです。その、神の気前良さ、恵みが先にある、そのすばらしい神を知って、それで神への信頼が増して、命じられた時に疑わずに従うことができます。

その恵みというのは、「不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められ」というものです。ここがなかなか理解できない。不敬虔であれば、その不義に対する報いを受けなければいけません。けれども、どんなに悪を行った者であっても、失敗多き人生であっても、それでも、神を信じる者には恵みが注がれる。そう信じるのが、神の前で義と認められます。大事なものは、神への信頼、神の恵みへの信頼です。私たちに足りないのは、頑張りではありません。足りないのは、神がこれほど気前の良い方なのだということを知る、大胆さがなく、図々しさがないことです。

興味深いのは、日本語の訳ですが、行いを労働のように訳していることです。英語ですと、同じ行い、work ですが、日本語においては、行いと働きという二つの言葉がありますね。仕事をして、それで賃金の給与がありますが、それは当然支払われるべきものですが、アブラハムの場合は、その報いは一方的な恵みでした。私たちが、主に従っていく時に、「こんなにやったのに・・・」という思いになった時は、当然支払われるべき賃金のようにみなしているからであり、恵みではなく、自分の行いに頼っているからです。

2C 不敬虔を義と認める方 6-8

⁶ 同じようにダビデも、行いと関わりなく、神が義とお認めになる人の幸いを、このように言っています。⁷「幸いなことよ、不法を赦され、罪をおおわれた人たち。⁸ 幸いなことよ、主が罪をお認めにならない人。」

先ほど話しましたように、ダビデにも不敬虔な人生の一面がありました。それがバテシェバとの姦淫と、その夫ウリヤを殺したことです。そのことを預言者ナタンに指摘されて、彼は主の前で罪人だと告白しました。そうしたら、主もその罪を見過ごしてくださったとナタンは宣言したのです。そこで歌ったのが、この詩篇です。彼も、行いとはかわりなく、神に義と認められた人なのです。こうして、ユダヤ人の最も偉大な人物、アブラハムとダビデの二人が、行いとは別の義によって義と認められています。

2B 割礼によらない義 9-12

⁹ それでは、この幸いは、割礼のある者にだけ与えられるのでしょうか。それとも、割礼のない者にも与えられるのでしょうか。私たちは、「アブラハムには、その信仰が義と認められた」と言っていますが、¹⁰ どのようにして、その信仰が義と認められたのでしょうか。割礼を受けてからですか。割礼を受けていないときですか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときです。

パウロは、アブラハムの生涯の順番を注意深く追っています。アブラハムが割礼を受けるように命じられたのは、彼が 99 歳の時です。イシュマエルが生まれて 13 年も経っていますが、イシュマエルが生まれる前、だれも子供がいない時に、夜空の星を見て、子孫がそのようになると神に言われて、神を信じたのです。それが義と認められました。ですから、割礼を受けたことによって義と認められたのではなく、受ける前に、無割礼の時に義と認められました。

このことはユダヤ人にとっては、衝撃が走るような歴史的事実です。割礼を受けることによって、契約の民になる、つまり神の前に義と認められるのだと信じていました。だから、神の恵みをわかっていない者たちが、割礼を受けなければ救われないと教えて、それでアンティオキアでパウロやバルナバと激しい論争の対立が起こったのです。けれども、確かにアブラハムが神に正しいとみなされたのは、割礼前であり、無割礼であっても信仰によって義と認められることを、かえって示しているのです。

^{11a} 彼は、割礼を受けていないときに信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしを受けたのです。

パウロはすでに、割礼について教えていました。「2:28-29a 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上のからだの割礼が割礼ではないからです。29a かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。」割礼は、心の包皮が取り除かれて、神の声を聴くことができるようになることを意味しています。その本質は、神のことばを聞いて、信頼して、それで神が心を清めてくださることなのです。信仰によって、心に割礼を受けることができます。

そして、肉の包皮を切る割礼、外見の割礼は、その心で起こったことを確認するものです。それと、水のバプテスマは似ています。バプテスマを受けて、初めて新しく生まれるわけではありません。信仰によって、御霊によって新しく生まれるのであり、そしてそれを確認するものがバプテスマです。

^{11b} それは、彼が、割礼を受けないままで信じるすべての人の父となり、彼らも義と認められるためであり、¹² また、単に割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが割礼を受けていなかったときの信仰の足跡にしたがって歩む者たちにとって、割礼の父となるためでした。

パウロは、ここで割礼を受けているユダヤ人だけでなく、受けていない異邦人も、アブラハムが父とすることができることを教えています。アブラハムの信仰の足跡にしたがえば、肉の割礼がなくとも、それで義と認められるのです。そして割礼を受けているユダヤ人も、割礼だけでアブラハムを父とするのではなく、内実、つまり信仰によって歩んでいるかどうかによって、アブラハムを父とすることができるのです。ということで、アブラハムの父と呼ぶ土台を、パウロはユダヤ人たちが思っているものとは変えました。肉の割礼によるのではなく、信仰によるものなのだとということです。

2A 信仰による父 13-25

1B 約束の相続 13-16

¹³ というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいは彼の子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰による義によってであったからです。

アブラハムの生涯の特徴は、「相続の約束が与えられた」というものです。主に呼び出されて、故郷のウルを旅立って、カナン地のシェケムに着きました。そこで、主が現れて、「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」と約束されたのです(創世 12:7)。そして甥のロトが自分から去った後で、主が大きな約束を与えられました。「13:14-17 さあ、目を上げて、あなたがいるその場所から北、南、東、西を見渡しなさい。15 わたしは、あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与えるからだ。16 わたしは、あなたの子孫を地のちりのように増やす。もし人が、地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えることができる。17 立って、この地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに与えるのだから。」彼の子孫に、これだけの広大な土地を与えるのだ。だから、そこを踏みしめて、かみしめておきなさい。子孫は地のちりのように増えて、彼らに永久にこの地に与えるのだと言われました。

そして、ずっと後に、報いが大きいと神に言われて、子孫が星の数になると言われ、それだけでなく、契約を結んで言われました。「15:18b あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで。」なんと南はエジプトの川まで、北はシリアにある大河ユーフラテス川までの領域を与えると約束されました。そして、この約束に基づいて、ヨシュアの時に十二部族に土地の割り当てが与えられましたが、まだまだ占領していないところがあり、ようやくソロモンの時代に、そこまでの影響力を及ぼすことができました。所有にまでは至っていません。これは、将来、世の終わりに主が戻って来られた時に神の国において実現、完成します。

このように土地の相続に対する約束がありますが、それだけでなく、子孫が星の数、海の砂の数のようになると言われました。これも彼に与えられた相続財産と言ってよいでしょう。それが、実は、キリストにあって信仰による子孫にまで及んでいたのです。つまり、イスラエル人がそのように増えるだけでなく、イスラエルから出て来るキリストによって、世界のすべての民族が祝福を受けるといふことなのです。アブラハムの相続は、なんと世界にまで及んだのです。そして、キリストにある

者は、異邦人であっても、神の国における相続が割り当てられます(ロマ 8:17)など。したがって、アブラハムに与えられたのは、「世界の相続人となるという約束」だったのです。そもそも、神は初めの人アダムに、地にあるものを支配しなさいと命じられて、世界の相続を命じておられました。それが、アブラハムによって回復されていくとも言えます。

そして、これが律法によってではなく、信仰によってなのです。これをパウロが繰り返しているのは、律法を持っているユダヤ人たちだから神の国を相続できるのだと思っていたからです。

¹⁴もし律法による者たちが相続人であるなら、信仰は空しくなり、約束は無効になってしまいます。

律法が与えられているユダヤ人であれば、無条件に相続人になるというならば、では、アブラハムの抱いていた、躍動的な信仰はいったいどこにあるのか？ということになります。信仰を働かせなくてもユダヤ人であれば自動的に相続人となるのであれば、信じなくてもいいじゃん、ということにありますね。空しくなります。そもそも、律法はモーセによって与えられたのですから、アブラハムのいたより約 430 年後のことなのです。律法とはかかわりなく、相続の約束が与えられました。

また、約束は、信じるからこそ有効ですね。こうしてあげると約束して、それを信じます。例えば、一万円あげると言われてそれを信じているのに、「いや、自分で今日一日バイトして、一日稼ぎます」と言ったら、約束が台無しです。このように、律法の行いによって約束というものを無効にしてしまうのです。

¹⁵実際、律法は御怒りを招くものです。律法のないところには違反もありません。

律法によって、相続の祝福が得られるとしたらそうではありません。モーセによって律法が与えられ、それらを守り行えば、約束の地で祝福されるとはありますが、背けば、呪われると前もって警告されていました。そして、イスラエルの歴史は事実、律法に違反して、土地が呪われてしまった。飢饉が起こり、敵が攻めて来て、ついに捕囚の民となって引き抜かれてしまいました。

しかし、違反したら呪いがあるという律法がまだ与えられていない時に、神はアブラハムに約束をくださったのです。ですから、イスラエルが不従順であっても、それで約束が無効にされるわけではないのです。モーセの律法の中にも、主がアブラハム、イサク、ヤコブへの約束を思い出し、彼らが主に立ち返り、離散したところから戻って来るようにさせると約束されているのです。(レビ 26:41) 律法ではなく、信仰による義で、アブラハムのゆえに神は、彼らに戻してくださるのです

¹⁶ そのようなわけで、すべては信仰によるのです。それは、事が恵みによるようになるためです。こうして、約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持つ人々だけでなく、アブラハムの信仰に倣

う人々にも保証されるのです。アブラハムは、私たちすべての者の父です。

パウロはまとめています。「すべては信仰によるのです。」と。そして、もっと事の本質をパウロは述べています。「恵みによるようになるためです。」ということです。前回でしょうか、キリスト教の本質、他の宗教との本質的な違いは、「恵み」だと言いました。神が、初めに天地を創造したというところから始まり、黙示録の終わりは、「主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。」なのです。神が良くしてくださる恵みで始まり、主イエスの恵みによって終わるのです。神のご計画全体は、恵みによって彩られています。そこで必要なのは信仰なのです。神を信じること、神の約束されていることばを信じること、神のなされていることを信じること。これが必要です。

そして、アブラハムへの約束というのは、律法を持つユダヤ人だけでなく、アブラハムの信仰に倣うすべての人に保証されているということでまとめています。すべての者の父です。

2B 望みえない時の望み 17-22

そして、この信仰とは一体、どういうものなのかをパウロは説明します。私たちは信じるというと、何か書かれている、箇条書きになっているものを納得し、それを知的に受け入れることだと思ってしまいます。けれども、アブラハムの生涯にある信仰は、そんなもので全然ありません。生涯をかけたものであり、生活がかかっているものであり、実に躍動的です。

躍動的だけでなく、ちょっとやばい、気が狂っているのではないか？と思われるようなものなのです。それは、「全く望みがないのに、望んでいる」という信仰であり、「無いのに、あるものであるかのようにみなす」ことであり、「死んでいる者をよみがえらせる」ようなものなのです。

¹⁷「わたしはあなたを多くの国民の父とした」と書いてあるとおりです。彼は、死者を生かし、無いものを有るものとして召される神を信じ、その御前で父となったのです。¹⁸ 彼は望み得ない時に望みを抱いて信じ、「あなたの子孫は、このようになる」と言われていたとおり、多くの国民の父となりました。

すべての者の父となったということは、すでに神に約束されていて、「わたしはあなたを多くの国民の父とした」という言葉が与えられていました(創世 17:4-5)。先に話したように、これは、アブラハムに子が与えられず、それでサラが女奴隷ハガイを通して、イシュマエルが与えられてから13年後のことです。99歳です。それでも、サラから産まれる子が約束の子であると主は、アブラハムに語られたのです。つまり、これは何も無いところから有るもののように呼び出す方を信じなければいけない約束です。何も無いところに、闇に対して、「光よあれ」と神が言われた、その無から有を創造する神の働きが必要です。そして、死んでいるのに命を与えるような信仰も必要です。アブラハムもサラも、生殖能力として死んでいます。けれども、それでも命を与えてくださるという

信仰が必要なのです。それを信じて、ようやく、多くの国民の父になるという約束が実現します。

¹⁹ 彼は、およそ百歳になり、自分のからだですでに死んだも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。²⁰ 不信仰になって神の約束を疑うようなことはなく、かえって信仰が強められて、神に栄光を帰し、²¹ 神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。²² だからこそ、「彼には、それが義と認められた」のです。

ここは、午前礼拝でじっくりと説明させていただきました。ぜひ動画をご覧ください。そして、ここでは話していなかったこととお話しします。22 節です、「だからこそ、「彼には、それが義と認められた」のです。」ということです。信仰によって義と認められるということが、このような神の約束を一途に信じる、躍動的なものなのだとということです。

しばしば、パウロの書いたローマ人への手紙と、ヤコブの手紙が矛盾しているものなのか？という話が出てきます。ヤコブの手紙では、アブラハムが義と認められたのは行いによるのだ、とはっきり書いているからです。「ヤコブ 2:21-24 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、行いによって義と認められたではありませんか。22 あなたが見ているとおり、信仰がその行いとともに働き、信仰は行いによって完成されました。23 「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。24 人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことが分かるでしょう。」まるで正反対のように書いていますね。

けれども、ここでヤコブが取り扱っているのは、信仰といってもどんな信仰なのか？ということです。言うだけが信じていることではない。信じているというのは、神への全幅の信頼であり、自分を捨てることであり、任せることであります。神は良くしてくださいます。その恵みに気づきます。そうすると、人は神への信頼が与えられます。そして、自分の理解できないことを神から言われても、この方が言われるのだからと、この方を信じて、それを行います。そうやって、行いが伴うのです。義と認められるのは、行いではなく信仰によるのですが、その信仰は行いと共に働くのです。言い換えたら、本当に信じていることが行いに現れます。神を信じていると言っても、悪霊だって神を信じていると、ヤコブは手紙の中で言います。神の恵み、神の良さを知って、それを信頼して、言われた通りに行く時に、その人が確かに信仰によって義と認められたと明らかにされるのです。

3B イエスの復活による義 23-25

²³ しかし、「彼には、それが義と認められた」と書かれたのは、ただ彼のためだけでなく、²⁴ 私たちのためでもあります。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです。

信仰の足跡を残してくれたアブラハムですが、私たちも同じように、信仰による義を得ることができます。つまり、全く死んだようになっていたサラの胎、またアブラハムの子を持つ能力なのに、それでも男の子が与えられると信じたように、私たちは、イエスが死んだのに、それでもよみがえった方を信じるのです。そしてその信仰が義と認められるのです。

²⁵ 主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。

ここがとても重要な箇所でしょう。私たちは、背きの罪のゆえにイエス様が死に渡されました。これはよく分かると思います。けれども、イエス様は死の中に留まっていませんでした。ご自身は罪を犯さず、その義の行いの中で死なれました。人間的に言えば、無実の罪が着せられて、死にました。しかし、冤罪事件というのがありますね。それを証明されて、再公判をし、無実であることを晴らすということが、日本の中でも時々あります。それと同じように、イエス様は神のみこころを全うされました。正しい行いをされました。十字架で死なれる、その息を引き取られるところまで、神に対して忠実でした。それゆえ、この方が確かに正しい方であったことが、この方を神がよみがえらせることによって、晴らしたのです。墓の中に閉じ込めることなく、死から解放されたのです。

そして、私たちがこの方を信じる時、この方が私たちの罪のために死なれ、よみがえられたと信じるならば、この方の義が私たちに賜物として与えられます。ですから、神の前に、全く罪を犯さず、正しく生きた方の正しさが、私たちに与えられるのです。私たちは、十字架の上でイエス様が死なれたということは、自分の罪のためであったことがわかります。けれども、イエス様が死者の中からよみがえられて、自分の罪は取り除かれ、葬られたことを確信することができるのです。

以前、お分かちしましたが、私がイエス様についての映画「ジーザス」で、大泣きしてずっと泣いていた場面がありました。十字架ではありません。復活でした。十字架は、「私の罪のせいで、主は、こんな苦しみを受け、死なれた。」という厳粛な思いになりましたが、それ以上ではありませんでした。しかし、三日目に弟子たちの真ん中に現れたのを見た時に、罪の赦しは確かになされた。ご自分の死を滅ぼしてくださったことにより、私の罪を葬り去ってくださった。勝利だ、この方は生きておられる。罪と死は、いずれこのいのちの中に呑み込まれる！と感動したのです。復活によって、私たちは義と認められます。大胆に神の前に近づくことができます。神のものが、キリストにあってすべて施されます。神が罪を赦してくださったことを、確かなものとしてくださっています。

今回は、義と認められた私たちに与えられている祝福から見ていきます。